

## 村東山手遺跡出土の垂飾りと穿孔具

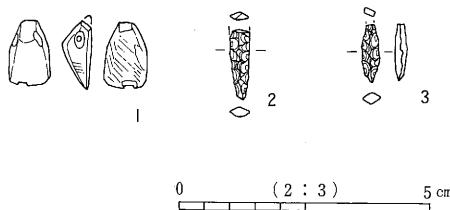
鶴田 典昭

### はじめに

村東山手遺跡は長野市松代町大室に所在する。善光寺平の西側に位置する奇妙山から伸びる尾根に挟まれた谷間に営まれた縄文時代中期から後期の集落址を主体とした遺跡である。上信越自動車道建設に伴い、平成元年と平成2年に発掘調査が行われ、敷石住居を含む12棟の竪穴住居址などが調査された。これらの調査成果は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』(長野県埋蔵文化財センター1999)として報告される。本項はこの報告書に掲載することができなかった垂飾りと穿孔具の追加報告である。

### 村東山手遺跡の垂飾りと石錐

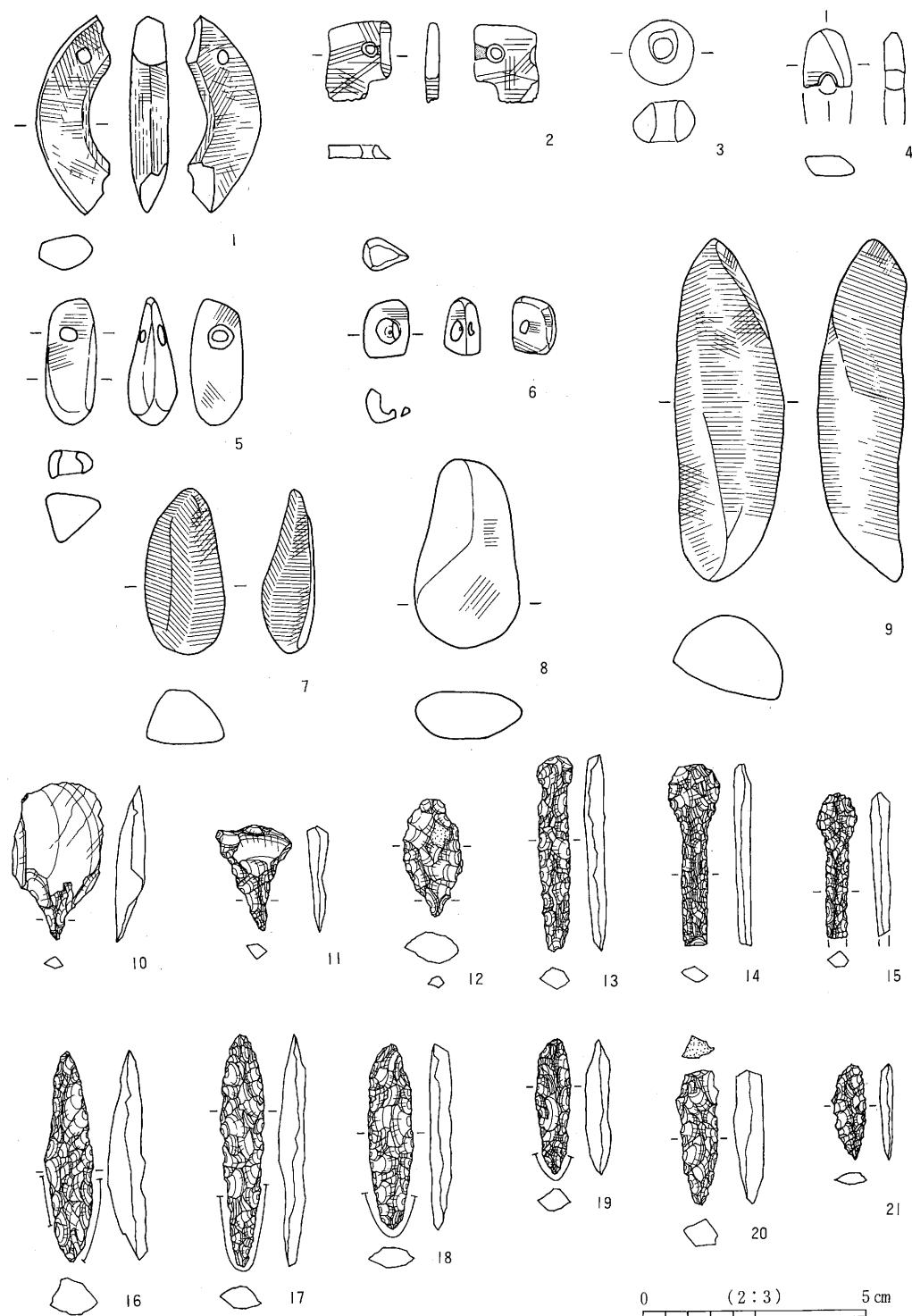
第1図1~3はSB11・12より出土したものので、今回追加報告するものである。1は灰色の滑石製の垂飾りで、長さ13.5mm、幅8.6mm、厚さ5.8mm、両面穿孔による孔が貫通している。孔の形状は2.5mm×3.5mmの橢円形を呈している。2と3はチャート製の石錐でいずれも基部を欠損している。先端部に僅かな摩耗痕が見られるが、明瞭ではない。2は長さ13.8mm、最大幅4.4mm、厚さ2.3mm、3は長さ11.0mm、幅3.5mm、厚さ2.5mmである。



第1図 村東山手遺跡未報告の石器

これらの石器が出土したSB11・12は、炉址2基と埋甕3基のみが確認された遺構で、竪穴住居の形状はまったく不明であった。埋甕はいずれも中期末葉のもので、2基の石囲炉が検出されたことから、2棟の竪穴住居が重複したものと理解した。SB12埋甕の周辺から多量の碎片がまとまって出土し、これらに混じって第1図の垂飾りと石錐が発見されたのである。碎片の出土状況は不明であるが、「ピット中にまとまって出土した」との証言もあり、垂飾りと石錐がピット内に多量の碎片と共に埋納されていた可能性もある。碎片はチャート245g、黒曜石164gが採取された他、少量の珪質頁岩などの石材がある。SB11・12覆土及びその床下からは、石鏃未製品などの小型の石器が多数出土しており、住居内で小型石器の製作が行なわれたことを示している。石鏃未製品はチャート製のものが多く、碎片の石材にチャートが多いことと抵触しない。これらの出土状況から、第1図の垂飾りと石錐は縄文時代中期末葉のものと判断される。

村東山手遺跡ではこれらの他にも垂飾りと石錐が出土した。第2図に示したものは報告書に掲載したもので、1と2は玦状耳飾、3は丸玉、4~6は垂飾り、7~9全面に研磨痕がある



第2図 村東山手遺跡出土の垂飾りと石錐

石製品である。1と2は形状と出土土器から縄文時代早期末葉～前期中葉のものと判断される。3～9は出土状況から後期堀之内式に伴うと推定されている。なお、4～9はヒスイ製である。10～21は石錐である。石錐は調査区全体で49点出土した。16～21のような棒状のものが23点と半数以上を占め、石錐の多くは中期末葉から後期前葉に属するものであることが確認されている。石材はチャート31点、黒曜石17点、珪質頁岩1点である。

### 垂飾りの穿孔について

第1図の石錐は第2図のものに比べ極めて小型で細い。第1図3は錐部の断面が $2.5\text{mm} \times 3.5\text{mm}$ であるのに対し、第2図の中でも小型の19は $5.5\text{mm} \times 8.0\text{mm}$ である。第1図2・3の錐部の太さが第1図1の垂飾りの孔の大きさに一致していること、石錐と垂飾りが石器製作址と考えられる住居址から一緒に出土したことから、これらは垂飾りの穿孔具と判断される。

次に、東山手遺跡出土の石製品の穿孔方法についてまとめておきたい。第2図1・2は両面穿孔であるが、1は孔が貫通していない。孔は円形で直径 $3.3\text{mm} \sim 3.5\text{mm}$ である。4～6はいずれも片面穿孔で、5と6の孔は円形で直径 $5.4\text{mm} \sim 5.5\text{mm}$ であり、6は穿孔が不完全で孔の底面にヘソ状の高まりが見られる。第1図1の滑石製の垂飾りの孔は $2.5\text{mm} \times 3.5\text{mm}$ の楕円形を呈している。

玦状耳飾り（第2図1・2）、滑石製垂飾り（第1図1）、ヒスイ製垂飾り（第2図5・6）の三者では穿孔の形状に差があり、それぞれ異なった穿孔具と穿孔方法が用いられていることが確認される。玦状耳飾りと滑石製垂飾りは幅 $3.5\text{mm}$ 前後の棒状の穿孔具、ヒスイ製の垂飾りは直径 $5\text{mm}$ 前後の筒状の穿孔具がもちいられている。また、玦状耳飾りの孔が円形であるのに対し、滑石製垂飾りの孔が楕円形であるのは、穿孔方法に何らかの差があったものと思われる。これらの穿孔具と穿孔方法の違いは時期の差、穿孔対象となる石材の違いなどによるものであろう。

長野県内では大町市上原遺跡や松川村有明山社遺跡などの玦状耳飾りの製作址と考えられる遺跡が発見されており、生産遺跡から完成品の形で玦状耳飾りが搬出されたと考えられる。しかしながら、補修などの穿孔作業は生産遺跡以外の各集落で行なわれたと考えられる。本遺跡の穿孔が貫通していない例などは村東山手遺跡で穿孔作業が行なわれた可能性を示す。

ヒスイ製と滑石製の垂飾りは中期末～後期前葉のものである。滑石製のものは出土状況から中期末葉のものであると判断されるが、ヒスイ製のものは中期末葉～後期前葉の時間幅でしか時期を押えることができない。滑石製の垂飾りは、穿孔具が伴って出土していることから、穿孔作業は村東山手遺跡で行なわれたものと考えられる。一方、ヒスイ製垂飾りについては、新潟県長者ヶ原遺跡などの生産遺跡が確認されているが、村東山手遺跡に穿孔された完成品が搬入されたものか、ここで穿孔作業が行われたかは不明である。長者ヶ原遺跡などの生産遺跡で穿孔された完成品が出土していることから、ヒスイ製の垂飾りは、生産遺跡において穿孔作業が行なわれたと考えておきたい。とすると、中期末葉から後期前葉ごろには、生産遺跡より搬入される垂飾りと、自家生産する垂飾りがあったとすることができる。